ヒトセカイマワルマチ

のんまさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒトセカイマワルマチ

【Ｎコード】
Ｎ３１０６ＢＡ

【作者名】
のんまさ

【あらすじ】
田舎の中でも都会であろうこの町は山もあり、畑もあり、川がある。電車も通っているし、バスもある。老若男女みんな生き生きと生活している。
でもそれは見せかけだけ。知らないところで町は、世界は廻る。

プロローグ（前書き）

楽しく書かせてもらってます！

プロローグ

人がいる。
当然のように。

人が現れる。
突拍子もなく。

人が変わる。
前触れもなく。

人が消える。
忽然と。

人が死ぬ。
タイミング良く。

されど・・・

されどまた人は増える。
知らぬうちに

この地球で人類は増える。増え続けている。
ついこの間世界中の人口が６５億人を突破したなど言っていたと思ったが、今年ついに７０億人を越えたとのことだ。

でも、
でも僕の、僕らの町では人がいて、現れ、変わり、消え、死んでいく。

当然のように、突拍子もなく、前触れもなく、忽然と、タイミング良く。

この町の人はのうのうと気づかぬ振りをして、
この町以外の人も気づかぬ振りをする。

この町は何かがおかしい。

ハジマリ

「ねえ聞いた？この間また中之条さん告られたんだって」
「で、その情報を俺に与えて何のメリットがあるんだい、文（ふみ）」
帰りのホームルームが終わり「いきなりなんだよ」と思いながら俺は顔を目の前に立っている女の子に向ける。
「またまたそんなひねくれたこと言って。ただの雑談だよ～。噂話は聞いて損はないじゃん。クラスのみんなのトレンドに乗り遅れることもないしねっ」
俺の目の前にいる女の子は幼馴染の・・幼馴染なのかもよくわからないのだが、坂之上文子（さかのうえふみこ）だ。というのも出会いが曖昧であるからだ。なんというかそこにいて当たり前。いつも隣にいるそれが坂之上文子。俺らはずっと一緒にいて、よく近所のおばさんに「双子みたいねえ」と言われたものだ。

「んー・・まあ、晴れて俺ら高校二年生になった訳だけど、えーと、中之条さんまた告られたのは凄いな。高校入って１０人ちょいだっけか。感心感心」
「もう。全然興味ないでしょ。そんなんだから彼女の一つや二つできるもんもできないんだよ」
「一つや二つの使い方に気を付けておけ。人間の数え方は一人二人だ」
「そんなのどっちでもいいんだよ！そんなことより中之条さんに告った人が凄いんだよ。あのサッカー部のエースの笹君だよ。あのイケメンの笹君だよ」
なんでこんなに女の子は噂話に食いつくのだろう。この興奮のしようはいつも気が滅入ってしまう。
「あーはいはい。で、付き合ったのか？」

「おっ、なんだかんだで気になってんじゃんよー。それが振っちゃったんだよ。もったいないよねー」
文は俺の脇を肘でつつきニヤニヤしながら話す。
なるほど。それで今日学校は朝から騒がしいのか。男は盛り上がり、女は嫉妬の眼と笹君の傷ついた心につけこもうとする輩の視線と思考が入り乱れる。

ははーんとわざとらしく文に聞こえるように言った。
「何よ」
「文、お前笹君のこと好きだったんだな」
俺は核心をついた。
が、
それはどうやらつもりだけであって外れたようだった。
文はすごく怪訝な顔をし「は？」と一蹴。文字通り俺は脛を蹴られた。
「これだからアキは彼女ができないんだよ。女心をまるでわかっていない」
余計なことを言ってしまったようだ。
「いい、アキは顔は悪くない、成績も良い、運動神経もいいからスペックは揃っているんだよ。後はあきは喋っちゃダメ」
コミュニケーションの一つを禁じられてしまった。
「わかったら帰るよ」
「・・・」
「返事は！？」
どうやら文は俺に彼女を作らせたくないらしい。
そこでの俺の反応は、
「喋るなって言ったくせに・・・」
せめてもの屁理屈だった。

帰り道。
「でも中之条さんももったいないよねえ。ほんともったいない」
「まだその話をしているのか。俺は別に興味ないんだから違う話題にしようよ」
「もしかしてアキはB専なの？」
「いや違うけどさ。普通だよ普通。かわいい子見ればかわいいと思うし、綺麗な子見れば綺麗と思うし」
「でも中之条さんのこと見ても何とも思わないんでしょ？」
「思わなくはないよ。美人で綺麗でモテるのもわかるよ。でもだからどうしたって感じだよ」
「アキは馬鹿だねえ。もっと自分から声かけなよ。もしかしたら、もしかするかもしれないのに」
「ないない。お近づきにもなれないだろうよ」
「そうかもね」
「おい」

でももし、もし俺が頑張れば、そのもしかしたらなんてことができるのだろうか？
もしそのもしかしたらがもしかしたらとして、俺はその後どのように過ごすのだろうか？
俺がそんな淡い妄想を文の横でニヤニヤとばれないようにしていると、その張本人である中之条さんらしき人がいた。
駅で、
柱に寄りかかり、
携帯を片手に、
一人で、
その綺麗な黒髪をなびかせながら・・・

ウワサバナシ

中之条未来（なかのじょうみらい）について俺が知っていることは少なくはない。けれど決して多くもない。

彼女はあまりにも有名だ。けれどそれは有名なだけであって俺自身関わったことはない。

俺は委員会も部活も入っていない。だから中之条未来と関わる事がない。

クラスも違う、共通の友達すらいない。

彼女の事は風の噂を頼りに聞くだけである。

だから中之条未来なんて存在しないと言われれば鵜呑みにするかもしれない。

いや、

それはない。少し言い過ぎた。

俺は昨年友達に連れられ中之条未来と思われる人を違うクラスまでわざわざ見に行ったからだ。彼女が本当に彼女なら彼女はやはり存在するのだろう。

ただ彼女に名前を直接聞いたわけでもないし、その友人の彼が彼女が中之条未来であると言っているだけで信じるのも些か阿呆というものだ。だから俺は彼女らしき人という表現を用いている。

しかし、まあ、そうは言っても、俺はそこで衝撃を受けた。

整った顔立ち。すらっと伸びる手足。綺麗で長い黒髪。何も細工をしてないような制服と化粧っ気ない美しい顔は清楚、清純という言葉がどんぴしゃりである。

その彼女らしき人は俺の想像をはるかに超え美しく、綺麗で、繊細だった。こんな女性が本当にいるのかと思ってしまうくらいに。噂の彼女は噂ではなく本当にある噂話であったのである。

中之条未来は人当たりも良い、らしい。
先生にも友達にも信頼されている、らしい。優しくしてもらった、励ましてもらったなどの噂をちらほら聞く。
例えば、横断歩道を渡っているお婆ちゃんに手を差し伸べた。
例えば、迷子で泣いてる子供をなだめ、一緒に親を探してあげた。
例えば、陣痛のきた妊婦さんのためにタクシーを拾ってあげた。
嘘のような、漫画の遅刻した主人公の言い訳のような事をした、らしい。
あくまでも噂話。人の話は半分である。といってもこのうちの半分をやってると考えるとその彼女らしき人は本物なのかもしれない。

でも、
でも、中之条未来は特定の友達がいない。大体昼ご飯を食べる時は一人らしいし、いつも登下校は一人らしい。

彼女は特定の友達がいない。
彼女はそこにいて当たり前で、俺にとっていなくても良い存在。
彼女は噂だけの存在で良いのだ。

そんな彼女は、
俺の知る限りの彼女は、
いつの日か変わり、
そして――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3106ba/

ヒトセカイマワルマチ

2012年1月9日00時48分発行